

361穴、すべて合意へ!

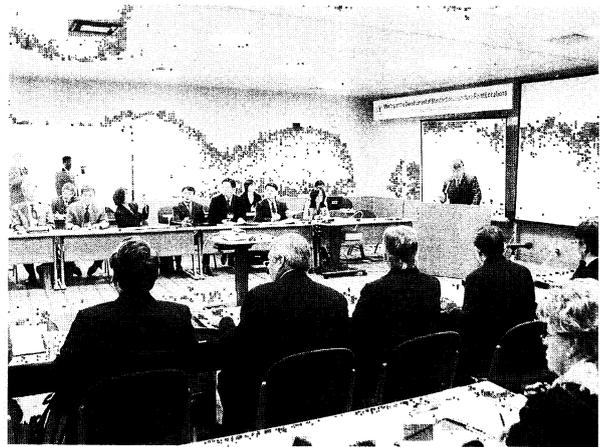
WHO 経穴部位国際標準化公式会議報告

会期：2006年10月31日～11月2日

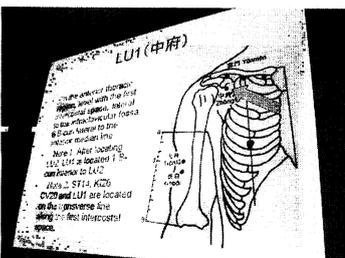
会場：つくば国際会議場 (茨城県つくば市)

第二次日本経穴委員会作業部会委員

(形井秀一、篠原昭二、坂口俊二、浦山久嗣、香取俊光、河原保裕、小林健二)



WHO (世界保健機関) による経穴部位国際標準化公式会議が10月31日からの3日間、つくば国際会議場で開催された。これにより、丸3年の歳月をかけて話し合われてきた361穴の経穴部位が正式に決まった。ここでは会議に参加した第二次日本経穴委員会作業部会委員による、会議の詳細な報告を掲載する。



■ 参加者 ■

1. WHO西太平洋地域事務局 (WPRO)

(1) 崔昇勲 (チェ・スンフン)
伝統医学諮問官

(2) Ma. Edwina Alvarez
秘書官

2. アメリカ合州国

(1) Brenda Golianu
スタンフォード医科大学助教授

3. シンガポール共和国

(1) Tat Leang Lee
シンガポール国立大学病院麻酔科教授

4. ベトナム社会主義共和国

(1) Tai Thu Nguyen
ベトナム国立鍼研究所所長

5. モンゴル国

(1) Zina Sereenen
厚生省伝統医学・リハビリテーション・高齢者健康管理担当官

6. オーストラリア連邦

(1) John McDonald
鍼教育諮問官

7. 英国

(1) Val Hopwood
公認理学療法士・鍼協会 (AACP) 教育諮問官

8. 中華人民共和国

(1) 沈志祥 (シェン・ジーシャン)
中華人民共和国国家中医薬管理局司長

(2) 黄龍祥 (ファン・ロンシャン)
中国中医科学院教授

(3) 趙京生 (ジャオ・ジンシェン)
中国中医科学院教授

(4) 呉中朝 (ウウ・チョンツャオ)
中国中医科学院教授

9. 大韓民国

(1) 姜成吉 (カン・ソングル)
慶熙大学校韓医科大学教授

(2) 金容爽 (キム・ヨンスク)
慶熙大学校韓医科大学教授

(3) 具成泰 (ク・ソソテ)
韓国韓医学研究院教授

(4) 任允卿 (イム・ユンギョン)
大田大学校鍼灸科教授

10. 日本

(1) 形井秀一
筑波技術大学教授

(2) 篠原昭二
明治鍼灸大学教授

(3) 坂口俊二
関西鍼灸大学講師

(4) 浦山久嗣
経絡治療学会学術部員

(5) 河原保裕*
日本鍼灸師会学術局経穴委員

(6) 香取俊光*
日本理療科教員連盟、群馬県立盲学校教諭

(7) 小林健二*
北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学
研究部客員研究員

(8) 斉藤宗則*
明治鍼灸大学助手

11. AAOM

(1) Jeannie Kang
アメリカ東洋医学会 (AAOM) 臨床講師

(2) Marilyn Allen*
AAOMシニアアドバイザー

12. WFAS

(1) 胡工国 (フウ・ウェイゴ)
世界鍼灸学会連合会 (WFAS) 常務副秘事
長

参加者の顔ぶれ



崔昇勳



Ma. Edwina Alvarez



Brenda Golianu



Tat Leang Lee



Tai Thu Nguyen



Zina Sereenen



John McDonald



Val Hopwood



沈志祥



黄龍祥



趙京生



吳中朝



姜成吉



金容爽



具成泰



任允卿



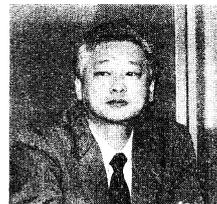
形井秀一



篠原昭二



坂口俊二



浦山久嗣



河原保裕*



香取俊光*



小林健二*



斉藤宗則*



Jeannie Kang



Marilyn Allen*



胡工国

(敬称略)

なお崔昇勲氏とMa. Edwina Alvarez氏はWHOスタッフとして参加。この2名と※印以外はすべて発言権のあるTemporary Adviserとして参加。※印はObserverとして参加。以下は会議の協力者。

13. 協力者

(1) 吉田和裕

順天堂大学院生

(2) 中島千恵、岩間かおる

筑波技術大学研究補助

(3) 伊ヶ崎克己

朝日医療技術専門学校教員

■ 今後に望むこと、フューチャープラン ■

(第二次日本経穴委員会委員長 形井秀一)

はじめに

2003年の10月31日、マニラで開催された第1回経穴部位国際標準化のための日中韓非公式会議開催から丸3年後の2006年、奇しくも、10月31日につくば市で最終の公式会議が開催された。そして、2日後の2006年11月1日午後5時50分、361穴の部位決定が達成された。その瞬間、20名の委員から盛大な拍手が湧き起こった。その拍手を聞きながら、3年間の様々な場面が私の胸を去来した。

WHO/WPRO (世界保健機関・西太平洋地域事務局) の崔昇勲氏は、開会式で、成田に向かう機上から晴れ渡った日本列島に富士山がくっきりと見え、今回の会議が実り多きものになるだろうと予見されると挨拶されたが、その言葉通りの結果となった。

この3年間の、第二次日本経穴委員会の運営5団体の支援とオブザーバー団体および協賛企業等の協力があった結果と改めて感謝するとともに、5団体から選ばれた作業部員にお礼を述べたい(表1)。

表1 第二次日本経穴委員会構成・関係団体

1. 運営5団体	3. 協賛企業
全日本鍼灸学会	医道の日本社
日本東洋医学会	山正
東洋療法学校協会	センネンキュウ
日本理療科教員連盟	セイリン
日本鍼灸師会	医歯薬出版社
2. オブザーバー団体	東洋学術出版社
日本伝統鍼灸学会	チュウオー
日本東洋医学系物理療法学会	日本特殊医科
経絡治療学会	4. 協力教育機関
	関西医療大学
	筑波技術大学
	明治鍼灸大学
	東洋鍼灸専門学校

表2 WHO/WPRO (世界保健機関・西太平洋地域事務局) が推進する標準化

1. 経穴部位標準化
 - ①WHOの公式本の出版 (2007年予定)
 - ②経穴掛け図、経穴人形等の製作
2. 用語標準化 (IST)
3. 医療情報標準化 (IS)
 - ①MeSH (検索用の語句)
 - ②オントロジー (メタデータを記述する用語の定義)
 - ③ICD対応電子カルテ用標準病名集
4. 鍼灸研究法ガイドライン作成

さて、経穴部位の国際標準化がなされて、今後どのようなことが期待されるのか、あるいは、何を今後展望し、どうプランニングしていくのかを考えてみたい。

今後の動き

つくば会議で最終的な経穴部位標準化が達成されたが、実は、WPROが進めている標準化は、経穴部位のみでなく、東洋医学用語の標準化、医療情報の標準化、鍼灸研究法のガイドライン作りなど多岐にわたる(表2)。WPROは、鍼灸をはじめとする東洋医学全体の用語や考え方、枠組みの標準化を行い、それらを東洋医学の世



議長を務めた形井氏と副議長を務めたBrenda Golianu氏が文献をチェックする

界的な研究、臨床へ活用しようとしているのである。経穴部位標準化はWPROの標準化の目標全体から見るとその1つの分野と位置づけられるであろうし、また、これら一連の標準化は、鍼灸を始めとする東洋医学が、世界に認知され、活用され、発展するために必要な作業であると考えられる。

これは、WHO/WPROのみでなく、中国などの今後の動きとしても注目される。

中国は、1970年代の資本主義各国との国交回復以来、中医学を世界に普及する活動を行っており、各国で認められつつある中医学を確固たるものにしようと目論んでいる。もちろん、日本鍼灸界や漢方界もそれは同じで、グローバル化しつつある東洋医学分野を世界に根付かせようとする際に、日本鍼灸や日本漢方を根付かせたいと考えており、このことは、東洋医学の歴史を有する各国の共通テーマであるし、東洋医学を積極的に定着させ、制度化しようとしている欧米各国の願いと言えよう。

経穴部位決定後の課題

①部位の再検討の課題

さて、経穴部位標準化後の課題は、どのようなものが考えられるであろうか。その課題を検

表3 ツボ研究の方法

- | |
|------------|
| 1. 文献学的研究 |
| 2. 形態学的研究 |
| ①ツボの形態学的研究 |
| ②経絡の解剖学的研究 |
| 3. 機能的研究 |
| 4. 臨床的研究 |

討するために、経穴部位の標準化の方法を考えてみたい。

経穴部位標準化の方法には、表3のようなものが考えられる。

今回の標準化の方法は、「1. 文献学的研究」方法であった。それは、1960年代から始まっていた経穴名や部位の標準化検討の際に採用された標準化法の原則を踏襲したものであり、2004年3月の北京会議で確認したものであった。古典文献を踏まえる方法は、現時点では、最も部位の決定が行われやすいし、過去の研究成果の文献学的整理をスタート点とすることは、最も通常の研究手法と言えよう。

もちろん、この方法も古典に示された内容を裏付ける実験などの実証が必要であるが、今回は実証的な検討は行っていない。

また、形態学的、機能的、臨床的研究を行う必要があるし、それらの方法で厳密に再検証して、今後さらに経穴部位を再検討する必要がある。

②標準化部位の国内普及の課題

その他にも重要な課題がある。

それは、今回標準化された361部位をいかに日本国内で普及し、世界と共通の基盤に立った鍼灸研究や鍼灸臨床、鍼灸教育が行えるようにできるかという課題である。幸い、東洋療法学校協会も日本理療科教員連盟も標準化された経穴部位を今後の教科書改訂の際に活かすか否か

を前向きに検討する姿勢を持っており、世界の情勢を踏まえた日本の鍼灸・あん摩の発展を視野に入れた教育を行おうとする意欲がうかがえる。第二次日本経穴委員会の運営母体である各組織の代表が、つくば公式会議の開会式や歓迎レセプションに積極的に参加くださったことが、そのことの何よりも明確な意思表示であると感激した次第である。

そして、もちろん、国内の鍼灸・あん摩の教育機関、関係機関への内容周知作業を第二次日本経穴委員会が責任を持って行うことが必要であることは言うまでもないし、普及のためには、国内公式版書籍の出版、図譜や銅人形の製作、あるいは、様々に工夫を凝らしたツボの本などの発行も必要であろう。すでに、出版社数社から幾つかのアイデアをいただいております、今後数年間は、この分野の出版活動が活況を呈することであろう。

表4 1991年までに公表された、WHOが決定した経穴など鍼灸関連事項

-
1. 十二正経の英語名称
 2. 八奇経脈の英語名称、表記法
 3. 腧穴(正穴)数; 361穴
 4. 腧穴の表記法(以下の順で、以下の項目すべてを明記する)
 - ①英語数値コード
 - ②ピンイン
 - ③正字(略字は中、日、韓の順でカッコ内に記載)
 5. 奇穴(47穴)の名称、表記法
 6. 頭鍼の基準線(14本)の位置と名称
 7. 鍼具の部位の名称、英語表記
 8. 古代九鍼の名称と英語表記
 9. 現代4鍼の名称と英語表記
 - ①三稜鍼 Three-edged needle
 - ②擻鍼 Ringheaded thumbtack
 - ③皮内鍼 Intradermal needle
 - ④皮膚鍼 Dermal needle
 10. 骨度分寸、手指同身寸
-

これまでの日本の鍼灸・あん摩の教科書には、1989年にWHOがジュネーブで決定した361穴の名称と表記法が採用されていない。十四経發揮を踏まえて、経穴総数を354穴として7穴は奇穴の扱いにしている。また、そのときまでに決められた英語数値コードなども、学校教育においては教えていない(表4)。今回標準化された部位を採用するか否かの論議の中で、世界標準化されているものの内容の再検討と採用への積極的な取り組みを期待したい。

おわりに

今後のツボ研究の方法は、①古典部位の実証的研究、②形態学的研究、③機能的研究、④臨床研究などが考えられる。

これらは、第二次日本経穴委員会が行ってきた古典の研究結果をさらに、現代科学・医学的な手法で再検証することである。そして、これらの研究を進めることは、ツボの研究にとどまらず、鍼灸・あん摩全体の実証につながると考えられる。全日本鍼灸学会の研究部経穴委員会では、このような姿勢ですでにいくつかの経穴の検討に入ったと聞いている。このような動きが今後ますます増加することを期待するものである。

今回の公式会議で決定したことは、経穴部位の標準座標である。その座標をより正しいものにするために、様々な角度からの検討が必要であることは言うまでもない。今回、標準として採用された部位が正しくて、採用されなかった部位が間違っていると言うことではもちろんない。決められた部位とそうでなかった部位がどのように異なり、また、どのように共通しているかを今後吟味していく必要があるだろう。

そもそも経穴が実在するのかという問いにはまだ、誰も答えていない。経穴現象が存在することを前提にして鍼灸学が成立していることは

事実であるが、実在を実証することが目標の1つであろう。様々な研究が、鍼灸あん摩の分野には必要とされている。今後の研究成果に期待したい。

■ 会議での決議事項等 ■

(関西鍼灸大学 坂口俊二)

今回、2日半の会議では、9カ国、2団体の代表による日中韓3カ国案についての最終検討が行われた。最初に検討されたのが、経穴部位標準化の際の考え方の原則である。これは、第1回(マニラ)、第2回(北京)で開催された「WHO経穴部位国際標準化に関する非公式諮問会議」で検討し、それをもとに、これまで3カ国で経穴部位の検討作業を行ってきたもので、経穴部位の決定に関する理論と方法を記載した、いわゆるガイドラインである。

内容的には、最初に骨度法、同身寸法、体表上の解剖学的指標、取穴の際に基準とする経穴などが示され、次に参照される古典文献、取穴の原則や部位決定に利用できる方法が明記された。さらに、古典文献によって検討された同身寸(骨度折量分寸)が確認された。このように、経穴部位を定めるための基準や表記方法を詳細に盛り込み、ガイドラインが確認された。なお、ガイドラインの完訳が終了していないため、今回は概要のみを列記した。

ガイドラインの確認後、3カ国で併記となっていた6穴を除く355穴の検討作業に入った。ここでは3カ国で作成した草案に基づいて一穴ずつ読み上げ、上記の原則に基づいた表記がなされているか、用語の使い方は適切かなどについて意見を交わしながら、作業を進めていった。草案では経穴によっては、部位以外に注記が付けられた。これは取穴法の要素を含んだもので、部位を確定するのに有用な情報が明記された。

草案の一例を示してみると、手太陰肺経の中府は次のようになった。

LU1 : On the anterior thoracic region, level with the first intercostal space, lateral to the infraclavicular fossa, 6 B-cun lateral to the anterior median line.

Note 1 : After locating LU2, LU1 is located 1 B-cun inferior to LU2.

Note 2 : ST14, KI26, CV20 and LU1 are located on the transverse line along the first intercostal space.

中府：前胸部、第1肋間の間隙、鎖骨下窩の外側、前正中線の外方6寸。

注1：雲門を定めた後、中府は雲門の下方1寸に取る。

注2：庫房、或中、華蓋、中府は第1肋間隙に沿って横に並んでいる。

以上のように、経穴部位は最初に体表区分が示され、次いで部位が明確になるよう横と縦のラインが示され、その交点が目指す経穴になるように表現されている。注記では、取穴法や経穴の位置関係などを示すよう工夫がなされている。

こうして355穴の確認作業が終了し、最後に日中韓案では併記となっていた6穴(水溝、口禾髎、迎香、勞宮、中衝、環跳)の作業に入った。まず併記案のそれぞれについて、日中韓が他の参加者に向けて数分間のプレゼンテーションを行い、それを受けて質疑応答を行った。最終的には、WHOの公式刊行物には両案が併記されることになったが、どちらを本文にし、どちらをその他として記載するかについては投票で決められた。

水溝については、日本・韓国案の「人中溝の中央」が本文となり、それを受けて口禾膠も決定された。迎香については中国案の「鼻翼外縁中点の外方」、労宮は日本・中国案の「第2-3中手骨底間」、中衝は中国・韓国案の「中指尖端」、環跳は、同じく中国・韓国案の「大転子の外方(後方)」がそれぞれ本文となった。中衝や環跳などの部位は、戸惑いを隠せない点もあるが、それだけ世界各国で中国鍼灸が普及していることを示す結果となった。

経穴部位標準化の原則、361経穴の部位の検討を終え、最後に部位を具体的に示す図や経穴人形などのプランや、今後の作業目標として、例えば各経穴への刺鍼方法(深度や方向など)、奇穴の部位などに関する意見が出された。

今後は、本会議で決定した内容の最終確認作業を行い、2007年にWHOから公式刊行物として出版されることとなる。一方、日本では学会誌上や報告会、また出版物などを通じて、学校教育や臨床などに活かされるよう統一基準に準じた取穴部位を浸透させていくこととなる。今回の基準統一を契機に、経穴の解剖学的、生理学的、臨床的な有効性についての研究がますます盛んとなり、国際的な比較ができるようになることが期待される。

■ いちメンバーとしての印象 ■

(第二次日本経穴委員会副委員長 篠原昭二)

はじめに

経穴部位国際標準化公式会議が、10月31日午前9時定刻にスタートした。WHO西太平洋地域事務局(WPRO)の崔氏が口火を切り、公式会議の意義、来賓紹介、メンバーの紹介、来賓による祝辞、メンバーの自己紹介、写真撮影へと進行した。そこで今回、これまでの非公式諮問会議とは異なる部分や会議の印象について紹

介する。

席順はアルファベット順

経穴部位国際標準化公式会議は非公式会議と異なり、形式的な内容が付加される。当然と言えば当然かもしれないが、これまでは中国(C)、日本(J)、韓国(K)の3カ国で実施してきたことから、それぞれの国のメンバーが隣り合って座り、相談しやすいような席順が通例であった。しかし今回の席順を決めるに当たって崔氏は、公式会議はアルファベット配列が望ましいと言いつつ切ったこともあり、急遽アルファベットでの席順へと変更された。

会議場はそれほど大きくないことから、議長席、副議長席、書記2名を含む4席の空きがあるわけではなく、形井先生が議長になることは事前に聞いていたことから、名札を議長席と個人名とを2枚重ねにして対応し、何とか大幅な席次の移動がないように配慮した。

一方、これまで何か問題があれば、日本側メンバーは公式のTemporary AdviserとObserverが集まって相談して結論を出すという方式を採っていた。しかし、形井先生、坂口先生は別々に座り、筆者と浦山先生のみが隣り合わせになるという席順であり、日本側にとってはなほだ不利な展開となったことは否めない。

会議開始直前になって、席の離れた韓国側メンバーがみんなと一緒にしてほしいと崔氏に依頼したが、公式会議はアルファベット順が原則だからだめだということで、結局認められなかった。しかし、午後にはベトナムから出席したTai Thu Nguyen氏が英語がよくわからないことから中国の先生の隣に座れるよう日本側からWHOに交渉し、これは認められた。

公式言語は英語

会議の公式言語は英語であり、すべて英語でのやり取りとなる。英語が得意でない筆者にと

っては、とても頭の痛い、そして、ストレス度の高い会議であった。ところで、英語ならではの興味深いやり取りがあった。

BL35 (会陽) の経穴部位の検討を行った。CJK 3カ国の草案は次のようなものであった。

BL35 : On the buttocks, 0.5 B-cun lateral to the extremity of the coccyx.

Note : When the subject is in a prone position or sits on his heel, bending forward so as to have his forehead on the table, BL35 is located at the soft depression lateral to the extremity of the coccyx.

会陽：仙骨部、尾骨の外方5分。

注記：患者が伏臥位またはテーブルの上で額を付けるように前向きにひざまづいたときに、会陽穴は尾骨の外側の陥凹部に位置する。

(正しい日本語訳については、今後第二次日本経穴委員会において作成することになるので、文意のみをご理解いただきたい)

これに対して、Note (注記) の中にある「his」では性差別の問題があるからだめだという指摘があった。この指摘に対して女性の副議長である、英国のBrenda Golianu氏は「両方を含むtheirがよい」と応じた。それに対して、オーストラリアのJohn McDonald氏は、「the subjectが単数なのにどうしてtheirを使うのか?」、これに対して、「じゃ、his/herにしよう」と提案。韓国の姜成吉氏が「Onesのほうがよいのでは?」となり、種々意見が出て、最終的には副議長のBrenda Golianu氏が「his/her」を採用した。

英語の文法、解剖学用語、経穴位置の古典的表現など、多くの問題を絡めた合意案が徐々に形成されていった。そして何よりも、ネイティブスピーカーが瞬間に、とてもスマートでわかりやすい平易な文章へと修正していくのには、感心せざるを得なかった。

会議の意味するもの

世界標準ができたこと自体が特筆すべきことである。会議期間中に応援に駆けつけていただいた茨城大学の真柳教授の、「史上3度目の快挙ですね。1度目は黄帝明堂経、2度目が銅人腧穴鍼灸図経、そして3度目が今回に当たります。しかし、世界的な合意というのは初めてではないでしょうか」というお言葉は、我々にとってとても励みになる一言であった。

世界標準化を行う会議の開催については、中国、韓国も自国での開催にとっても積極的であった。それが、つくばでの会議開催にこぎ着けたのは、当初、非公式会議は第1回のマニラに続いて、各国が1回ずつ(北京、京都、太田)計4回開いて最終案を決定する予定が、5回目を開かなくてはならなくなったときに遡る。第4回の韓国の太田会議で投票により5回目の開催地を決めることを3カ国が合意しながら、投票で一位になった韓国が辞退した。しかし、次点であった日本は責任を持って5回目の会議を開催するという一言を、形井教授が宣言された。この日本側の積極的で真摯な態度が、第5回の大阪会議で最終公式会議を開催する国を決めるときに、日本が選ばれた理由であり、第4回会議での一言の功績が最も大きかった。

日本で合意形成が行われた経穴部位の標準化案は「東京合意」であり、標準化の最終合意は「つくば合意」という意味合いを持ち、日本の鍼灸業界が世界に誇ってもよい業績の1つと考えられる。内容的には問題がないわけではない

が、それらは今後科学的な検証を通して漸次修正すればよいものである。しかし、今回の会議を通して世界中で経穴部位は統一されたわけであり、スムーズに導入されさえすれば、世界的な鍼灸研究の土台が整ったと言えよう。

標準化会議を支えた真の立役者

会議の開催には、相当な出費が必要になる。特にWHOの名称での会議の招聘は多くの制約や決まりがある。先に行われた東京での会議では、1日当たりホテル代も含めてであるが350ドルの日当が払われている。また、WHOの規定では、6時間を超える飛行距離の場合にはビジネスシートが用意されるとされている。今回のつくば会議においては、予め崔氏との打ち合わせにより、交通費やホテル代、食費という基本的な経費以外に、一人当たり238ドルの活動支援金をお支払いするというで実施させていただいた（もちろん、日本側メンバーは一切の活動支援金をもらわず、全くのボランティアとして参加したのは言うまでもないことである）。これらの出費はすべて寄付により賄われた。中国と韓国は、東洋医学は国の施策の中で保護されているので、このような会議が開催される場合は、国の予算でまかなわれる。国からの援助

のない日本では、志のある人や団体が自分たちで経済的な準備もしなければならない。その経済的基盤を支えていただいたのは、第二次日本経穴委員会の運営母体である全日本鍼灸学会、日本東洋医学会、日本鍼灸師会、日本理療科教員連盟、東洋療法学校協会の5団体であり、運営資金と臨時拠出金により全面的にサポートいただいた。

また、オブザーバー団体として、日本伝統鍼灸学会、日本東洋医学系物理療法学会、経絡治療学会からも毎年ご支援をいただき、つくば会議用の臨時拠出金もいただいた。

さらに、筑波技術大学、関西鍼灸大学（関西医療大学）、明治鍼灸大学、東洋鍼灸専門学校との4教育機関からも適時ご支援をいただいた。

また、協賛いただいた企業の、医道の日本社、山正、センネンキュウ、セイリン、医菌薬出版社、東洋学術出版社、チュウオー、日本特殊医科からも資金面でご支援をいただいた。

特に、医道の日本社は、24回開催された作業部会のほとんどにプレスとして参加し、逐一、タイムリーに作業内容を『医道の日本』誌上に掲載していただき、非公式会議の都度、レポートのための誌面を提供して下さった。本委員



オープニングセレモニーでは日本東洋医学会会長の石野尚吾氏が祝辞を述べた



同じくオープニングセレモニーで祝辞を述べた全日本鍼灸学会会長の矢野忠氏

会のホームページを作成する際にも、それらの貴重な誌面を転載して使用することを快諾いただいた。今回の日本での会議の合意形成に陰の功労があったことは、日本の全月刊誌の中で発行年限が最長の1つであることとともに記録されるべきことであろう。

これらの団体、学会、教育機関、企業からのご支援によって、今回の栄えある「つくば合意」が形成されたことを、誌面をお借りして、心より御礼申し上げますとともに、一般読者の方々にご報告させていただきたいと思えます。

■ 会議で問題となった内容に ■ ついてのトピックスと考え方

(経絡治療学会学術部員 浦山久嗣)

会議直前

マニラのWPROから、3日間の会議の叩き台となる議案がFedExで送られてきたのが10月中旬のことだった。今公式会議の言語は英語のみなので、当然、この議案もすべて英文である。このマニラ版は内容に若干の問題があったため、日本側から中国・韓国に修正すべき箇所や内容の確認を打診していた。

会議の1週間くらい前になって、日本側の意見を取り入れた最終版が作成されてきたが、できるだけ内容を把握しようとはしたものの、どこがどのように変更されているのか、詳細な確認ができないまま、会議に向かわざるを得なくなってしまった。

英語は大の苦手である。鍼灸学校在籍時代、東北大学の助教授から解剖の手解きを受けた際、一緒に英文の解剖学書を読むことになり、わずか半年ほどのことではあったが、週1回、1時間ほどのこの輪読会のハードな日々が思い起こされた。その当時「中学生以下？」とまで言われた私の語学力は低下こそすれ向上はして

いなかったが、このときの体験が多少なりとも役に立った。

会議の進行状況

オープニングセレモニーを終え、コーヒープレイクをはさんで、早速、本題に突入した。

この会議ではお馴染みとなった方式、つまり、プロジェクターで議案となるワード文書を映し出し、アドバイザー全員で内容を確認しながら意見を交換し、内容を修正しながら議事を進めて行く方式である。ここで大活躍したのが、副議長（議長は形井委員長だった）に指名されたアメリカ代表であるスタンフォード医科大学助教授のBrenda Golianu女史である。彼女はCNNキャスターばりのスピードの流暢な英語で議案を読み上げていった。いくら母国語とはいえ、初見でこうも澁みなく朗読できるものだろうかと思わせるほどの流暢さで、発音もキレイな上に声がかまた美しい。この会議がスケジュール通りにスムーズに進行できたのは彼女の功績が大きかった。議案の文章が修正され、誤りがないかどうか確認されるたびに、口癖のように「Perfect!」を連発していたが、彼女もまた議事の進行役としてperfectな存在だったのである。

もう1人perfectな人物がいた。2人の書記のうち1人、シンガポール代表であるシンガポール国立大学病院教授のTat Leang Lee氏である。彼はまず、アドバイザーが議案の文章を確認しやすいようにBrenda女史の朗読に合わせて、カーソルで朗読箇所を捕捉した。また煩雑な議案の修正にもすぐに対応し、校正履歴を表示しながら無駄のないキーボードさばきを見せた。

ネイティヴ・チェック

会議の目的は、3年を費やして日中韓で作成した議案、特に361穴の位置とその表現についての確認、および必要があれば修正することであるが、位置については特に異論は出なかった。

事実上、最も詳細に検討されたのは、より英語らしい自然な表現に修正することであった。

例えば、骨度法を意味する英文「Bone Measurement method」などは、「Skeletal (Bone) Measurement method」に改められた。単にSkeletalのみとせず、()内にBoneを留めた理由は、骨度法による1寸を、英文表記で1 B-cun (BはBoneの略、cunは寸の中国語読み) と言ひ、同指寸法のF-cun (FはFingerの略) と区別されているため、Boneを完全には削除しないように配慮したためである。

また、大阪会議(第5回非公式会議)では、経穴部位を表現するとき、縦のラインを先にするか、高さを先にするかで激論が交わされたが、この会議でもその点が問題になった。第3回TFT会議(韓国・大田での最終会議)では一応、体幹部は高さを先に、四肢はラインを先にするという原則で落ち着きはしたものの、この会議では、腹部などは体幹部でもラインを先に表現するように修正された。腹部などは直接高さを示す体表解剖学的指標がないという理由らしいが、徹底されておらず、つまるところ、英語の語感の問題のように思われた。それは、これら一連の修正作業をオーストラリア代表のJohn McDonald教授、アメリカ東洋医学会(AAOM)の韓国系アメリカ人Jeannie Kang女史(博士)、およびもう1人の書記であるイギリス代表のVal Hopwood女史(博士)というネイティブ・スピーカーが主導していたことでも推測できよう。

初日の内容

初日のハイライトとしては、個人的には、午前中に行われたガイドラインを挙げたい。

特に議論の対象とはならなかったが、議案の段階で修正されていた重要な項目が決定されたことである。それは下腿内側の骨度の問題で、



韓国サイドから様々な発言を行った金容奭氏

「内側顆の下縁から内果の頂点まで」を「13寸」とする『靈枢』骨度篇に由来する伝統的なものから、「内側の膝関節裂隙から内果の頂点まで」を「15寸」とするものであった。

実はこれは、既に北京会議(第2回非公式会議)で議論され、激論の末に中国側に取り下げさせたものであった。『靈枢』骨度篇には「大腿骨内側上顆の上縁から内側顆の下縁まで」を「3.5寸」と規定しており、中国側は「内側の膝関節裂隙から内側顆の下縁まで」を「2寸」と判断して「13寸」に加算したものである。

前腕の「12寸」説と同様に、分母を「13」とするよりは「15」のほうが遥かに利便性が高いため、日本側としても特に異論を差し挟まなかったのだが、すんなりと決まってしまったことは、北京会議の当事者としては一抹の寂しさがあった。

午後になると、議事は経穴の部位と表現を確認する作業に終始した。前述のように副議長の絶妙なリードによって猛スピードで進み、午後いっぱいかけて肺経から小腸経までを終えてしまった。

2 案併記の6穴

2日目も書記の報告で前日の議事を確認した

後、前日に続いてハイペースで進み、午後も半ば過ぎには、棚上げにしておいた2案併記の6穴(口禾髎、迎香、劳宮、中衝、環跳、水溝)を除いて、すべて終わってしまった。

この会議がもっとも盛り上がった場面は、やはり2案併記の6穴を討議したときだった。最初、英語のやり取りがわからなかったために、私は、単純に投票によって二者択一すると思いついてしまったが、あとで確認して、2案ともに残すが、どちらを主案にするかという優先順位をつけるための投票だったことがわかった。同じ勘違いを新聞各社もしてしまい、思わぬ論議を呼んでしまったが、投票が行われたという事実は変わらないので、訂正を促すことも難しいかもしれない。

投票権は各国1票で9カ国、それにWFASとAAOMの代表者が各1票を加え、合計11票で行われた。一番衝撃を受けたのは中衝で、日本が主張した「中指内側爪甲根部」説には日本以外には1票も入らず、中国・韓国の「中指先端中央」説に決まってしまったことである。20年前までは中国でも韓国でも日本と同じ説が十分通用していたのに、現代中医学がここ20年で全世界にいかん浸透していたかを思い知らされたのである。最後に投票が行われた環跳では日本説に日本以外にもう1票入ったことのほうが意外に思われたくらいである。

すべての経穴が決定されると、メンバーから自然に拍手が沸き起こり、達成感と脱力感と衝撃の中で2日目の会議を終えた。

図譜のプレゼンテーション

最終日はフューチャープラン(今後の計画)の重要課題である添付する図像について、韓国・中国・日本の順番でプレゼンテーションが行われた。韓国側からはカラフルで精緻な解剖図を駆使して合理的な取穴ができるように配慮

されたプレゼンテーションが行われ、中国側からはマーカーを付けた状態から同じ姿位、同じ角度で通常の写真とレントゲン写真を撮って合成する方法が試みられた。どちらも甲乙つけ難くアドバイザーの間から「両方を採用すればいいのに」という意見が出たほどであった。それに対して日本側の提案は、コンセプトを変えて、最も安価にスピーディーに刊行できる方法を選択した。今回の会議で決定された1穴ずつの条文に対して、簡単な経穴図を1図ずつ挿入すべきであることを主張し、全穴に対してそのモデルをつくったのである。この作業は小林先生がほとんどお1人でされたものであった。最も単純にして効果的であることは疑いないが、中国・韓国に比してインパクトにおいて見劣りした感があった。しかし、来年発行されるWHOの公式版は、日本の案に沿った図表が使われる見込みであり、日本側の意図が生きた形となった。

会議を終えて

会議を終えた後の昼食のときに、中国代表の黄龍祥教授が「この会議で一番得をしたのは日本だった」と奇しくも語ったように、絶対的に不利な状況にもかかわらず、中衝と環跳の日本説が別説として記録に残されたことを思えば、名を棄てて実をとったといえよう。

しかし、第二次日本経穴委員会がこれまで目指してきたものは、単に日本の流儀を世界に押し付けようとしていたのではなく、あくまで理想的で実用的な世界基準を目指して検討してきたものであった。その態度は今後とも変わらないと信じている。

また、今回特に感じたことの1つに、女性の活躍があった。日本でも世界的に活躍できる女性が数多く登場してくれることを願いたい。

■ 会議の裏側、準備状況など ■

（北里研究所東医研医史学研究所 小林健二）

会議前の準備

今回の諸々の準備は形井委員長と研究補助の中島千恵さん、岩間かおるさんの尽力の賜物で、関東勢の浦山、香取、河原、筆者は、実質ほとんど携わっていない。参加者のホテルの手配、外国から成田、成田からつくばまでの移動計画、ビザの申請、来賓の招待状、参加人数の把握、看板、国際会議場の会場手配と設営、2つの懇親会会場の段取り、パソコン、プロジェクターなどの事務機器、事務文具の備品の調達、お茶菓子の用意、3日間の通訳ボランティアの手配など、数え上げたらきりがなほど多岐にわたった今回の準備作業は筑波技術大学のスタッフによるものである。

関東勢の4人は会期の迫る10月15日に、つくばに集合し初めての打ち合わせを行った。このときはすでに全体の7割近い準備は終わっていた。確認の意味で集合というのが実際のところであった。しかしあと数日しかない。なかなかクリアできない問題の数々。その最たるものは中国参加者のビザの問題であった。最終的にビザが下りたのは最終のぎりぎり10月27日。形井委員長が、ビザが下りることを要請する文書を中国外務省宛に送り、その外務省の文書を添えて早期のビザ発行を促す文書としてビザ申請書類に添付し、中国代表が日本大使館へ提出するといった作業を行い、中国代表は5日間でビザを入手できた。毎回のことでこういうトラブルは慣れているとは言え、冷や冷やの綱渡りの世界であった。

また会議で使う一番重要な資料の「ガイドライン」「361穴の草案」が予定期日を過ぎてもなかなか日本側に届かない。ヤキモキする中、

10月16日にWPROから形井委員長のところに届き、早速メーリングリストで各委員に送付し、校正作業。これだけ遅れて来るのであるからには、相当細かいチェックがあり問題ないであろうと思っていたが、やはり最終の非公式会議合意案との比較で異なるところがあった。環跳穴の日本案が抜けている、北京会議で合意されたはずの『鍼灸甲乙経』を古典文献として入れていない、基準穴にピンインを入れない原則であったが入っているなどである。ガイドラインに骨度など理解しやすいように図版を付けることが決まっていたのであるが、その資料の添付もなく、急遽日本側で用意することとなった。

また、会議の進行上で361穴の英文だけの草案を皆で見つめ討論するのでは理解しにくいであろうと、これも会期1週間前の10月24日から筆者が361穴の図版と英文草案のパワーポイントの資料を作成し始めることとなった。最終的に10月29日までかかり、361穴草案、ガイドラインの図版を資料として作り上げ、何とか間に合ったと胸を撫でおろした。非常事態ということもあって、資料作成には東京衛生学園・東洋医療はりきゅう学科2年生の協力があつたことも付記しておく。また最終的には岩間女史により会期前日、当日の最終手直しバージョンが完成、これが会議の強力なプレゼンテーションの武器となった。

前日準備

さあ、明日が本番ということで、日本側スタッフは全員10月30日の正午にホテルに集合。形井、津嘉山洋（筑波技術大学保健科学部附属東西医学統合医療センター）両氏の2台の車からの荷物の搬入を会議場4階控室に済ませ、準備に取りかかった。

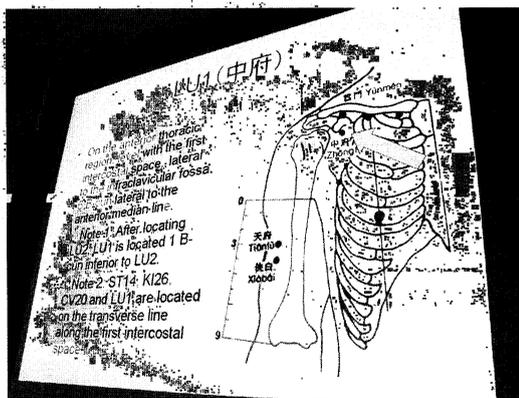
明日の会議に備え、名札、ネームプレートのセット、コーヒープレイク用のお茶菓子、お皿、

お盆、湯沸かしポット、テーブルクロス、いろいろ事前の用意はされていたが、足りないものが出てくる。ゴミ箱、ゴミ袋、電気の延長ケーブルなどは会議場近くのお店で皆で息抜きを兼ねて品揃えに行く。

中でも資料の印刷が一番てこずった。大量に印刷物があるためレーザープリンタを用意したまではよかったが、購入したばかりの新品・未開封で印刷できる状況にはなかった。プリンターのドライバをパソコンにインストールしようとしたとき、用意されたパソコンのセキュリティのためインストールできない。急遽、別のパソコンにインストールし印刷開始。すべて印刷が終わり穴開けパンチで穴を開け、バインダーに処理し終わったのは夕方であった。

会議用の名札、ネームプレート印刷は坂口委員が担当。プロ並みの見事な処理。名札ひとつで会場の雰囲気の様変わりした。

会場では形井、崔両氏が会議テーブルの配置、スライド投影の環境をチェック。緊張とあわたしさの中にも、わいわい雑談しながら楽しく作業が進められた。



会議中、常にサブプロジェクターに映し出されていた経穴図。これが日本側からの経穴図のプレゼン素材でもあった

当日準備

会議はやってみないと何があるかわからない。急に Val Hopwood 女史と WPRO の Ma. Edwina Alvarez 女史からパソコンを 1 台貸してほしいとの要望があり、至急 2 台用意。書記を務めたシンガポール代表 Tat Leang Lee 教授がパソコンのマウスがないため操作が機敏でないと言われ、急遽、石丸電気で購入。これで大幅に作業がはかどった。またプロジェクターのコードが短いためパソコンに届かないという注文で、これまた石丸電気で購入。まさに石丸電気様々であった。

実際、会議場の目の前に、こういうお店があったからいいようなもので、なければどうなっていたか。空恐ろしい気がする。

今回はメインのスクリーンに草案を投影し、サブスクリーンに補助的に図版資料を投影する手法をとった。会議が始まるや予期せぬ事態が発生した。開会し、崔氏がメインスクリーンに会議の必要性・経過などを映して報告し、次に中国のガイドラインの説明に入り、スクリーン投影を切り替えた際、プロジェクターにつないだ 4 台のパソコンの分岐ができないという事態に陥ったのである。昨日の準備段階ではできたのであるが、原因不明。結局サブで使用するはずであったプロジェクターを使用し、何とか間に合わせた。だが、一難去ってまた一難、今度は書記の Tat Leang Lee 教授のパソコンに接続しても「エラー」が表示され、スクリーンに投影されない。このパソコンから投影される資料を皆で検討し、教授が修正し、草案を書き直していくので一番重要なパソコンである。それが映らなければどうにもならない。そこに登場したのが英語通訳の伊ヶ崎氏であった。まったく日本チームは恐ろしい集団である。百戦錬磨というか、いろいろな経験を積んだ人の集まりの

強さを遺憾なく発揮した瞬間でもあった。

また夕方になると困った問題が発生。プリンターにトナー減少の黄色のランプが点灯！ 明日、会議資料印刷ができないことも考えられ、トナーを見つけにまたもや石丸電気へ。しかし、在庫なしの無情の答え。市内の電気店すべてなしということで、文具の通販「アスクル」に問い合わせたが、明後日の配送ということ。結局、岩間女史が秋葉原まで、翌朝つくばエクスプレスで買い出しに行くことになった。冗談で秋葉原に行けばあるから、などと言っていたことが本当のことになってしまった。ちょっと買ってきて、が秋葉原とは、恐ろしい話でもあった。

会議の他の裏方の存在のことであるが、3日間の会期中、つくば市の英語の話せるボランティアの人達に外国の方達をサポートしていただいた。右も左もわからない日本滞在で心強い存在であったと考える次第である。

また、会議は英語のみだったので、会議では表に出ることはなかったが、中国語の通訳・斉藤宗則氏（明治鍼灸大学、オブザーバー参加）も、韓国語の通訳・吉田和裕氏（順天堂大学院生、協力者）も貴重な存在で、裏で様々な意思疎通の重要な役割を担ってくれ、それぞれの国のメンバーは彼らのおかげで100%満足いく滞りになったと思う。

最後の準備

会議もスムーズに流れ、最後の送迎会ならびに打ち上げパーティーでは、筆者と河原委員は準備委員としての最後の仕事をした。というのも、最後の晩のうちに開会式の集合写真と3日間の会議の様子の写真をCD-ROMにして渡さなければいけないという責務があり、美味しい食事を目の前にしながら、パソコンでCD-ROMの作成。美味しい食事と楽しい語らいをよそに、せせと作業。パーティーの最後の時間ぎりぎ

りにCD-ROMが焼き上がりホッと胸をなでおろし、皆さんに手渡せたこと、受け取った皆さんも大喜びでこちらも満足だった。

準備委員としてのまとめというわけでないが、会場、機材の準備もさることながら、会議がスムーズかつ成功裏に終わったことには、日中韓、諸外国の参加者、その他多くの協力者の人選が多く重要な位置を占めていると考える。形井委員長の穏やかで柔らかな雰囲気、崔氏のねばり強い、かつ人を思いやる人柄が全体をまとめていったものであると確信する。

参加印象記～今、世界への第一歩～

（日本理療科教員連盟代表 香取俊光）

361穴すべての部位が合意された瞬間に熱い物が溢れてきた。公式会議の運営が順調に終わった達成感だったのか、ここ2年間あまりの出来事が思い出されたためか、作業部会の各委員との別れが近くなった寂しさだったのか……。ともあれ、歴史的な事業に参加できた幸せも感じつつ、私の印象をいくつか報告したい。

全体の印象

私は約30年前の学園都市造成以前から当地周辺を訪れていて、来る度にますます発展していく様に驚かされていた。楽しみにしていたつくばエクスプレスにも乗れ（驚くほど揺れません！）、会場のつくば国際会議場に着くとその前にミニ秋葉原電気街ともいう大型電気店が並んでいて、百円均一店もあり、物品の調達にも重宝し、外国の参加者がお土産も求められていた。

中国・韓国の代表とは顔なじみとなり、交流も深まってきたが、中国の王雪苔代表が病床で来日されなかったのは残念であった。中国・韓国の代表は、多くが何回目かの来日なので、納豆や刺身を自国風にアレンジして食べていた



ウェルカムパーティーの様子。皆、黄帝内経明堂経の巻物（もちろん本物ではない！）に興味津々

り、日本方式で食べていて「おいしい」と好評であった。

また、アメリカからは鍼灸雑誌「Acupuncture Today」(22000部発行)の記者も来日していて、世界の鍼灸普及の一端を知り驚かされた。

会議中の印象

会議はすべてが英語で行われ、自分の語学力のなさや国際性のなさに恥じ入るばかりだが、英語による進行の速さは通訳の煩わしさが無い爽快感があった。また、これまでの白熱の非公式会議の論戦は、漢字の奥深さと微妙なニュアンスが漢字使用圏であったからできたことであり、浦山委員が「古典を英訳したくない」とこだわりを持っていたのは、日本人としてちょっとうれしかったことであった。

また、女性の代表者が5人おり、副議長と記録係（書記）の1人に女性が選ばれ、議事が女性のBrenda Golianu氏のリードにより進められたことも、緊張感の中に和やかな雰囲気となった。

361穴が1穴ずつ検討され始めると、これまでの非公式会議の紛糾ぶりが思い出されたが、心配をよそにハイスピードで可決されていた。運営が順調な安心と、逆に1穴決まる度に

責任の重さが増していった。

世界の鍼灸界が日本に期待、そして課題

休憩時間や会議後のレセプションの交流の中で、日本の鍼灸への期待や活躍しなければならない責任の大きさを実感した。

世界の各地で、住居の改善やエアコンの普及が進み、皮膚の感受性が高くなってきている。中国でもどんどん鍼が細くなっていったり、交流したシンガポールやモンゴルの方は中国式の鍼は「痛い」ともらしていたことからしてもそれは想像できよう。もちろん刺鍼技術も問題とはなろうが、日本にある接触・浅刺・細い鍼による鎮痛の論理・技術は受け入れられるし、その伝達が期待されている。すでに経絡治療の研修に来られている代表者とも交流し、乳幼児の治療に当たっているとのことであった。

課題としては日本に学びたいという希望に対し、受け入れるには困難が多いことである。1つの事例として研修費より滞在費のほうがかかることを伝え、「それでは逆に日本の方を講師として招待しますよ」との答えがあった。理教連でも、海外支援を行っているがまだまだ多くの国からの要望があることが確かめられた。

茨城大学・真柳誠教授を交えた反省会

最終日の日本側の反省会に、真柳氏が参加されて、経穴部位標準化の展望と課題が話し合われた。氏は3カ国の鍼灸古典の交流や影響のこと、その中でも日本の役割が大きかったこと、先に記した世界の皮膚の感受性が高くなってきたこと、今回の経穴部位の統一は、約2000年前の明堂経（現存せず）、約1000年前の銅人腧穴鍼灸図経（1027年）に続く3回目の経穴部位の統一であることを指摘していた。つまり、今回の会議が世界的事業であったことを指摘されていたのである。人の短い人生の中で、今回の経穴部位の標準化の責務の重さと歴史的瞬間に携

会議終了後のコメント

崔昇勲氏（WHO西太平洋地域事務局伝統医学諮問官）

「この会議の結果を受け、喜びを感じるとともに非常に満足しています。私たちが経穴部位の国際標準化作業を始めたのは約3年前です。その間、中国、日本、韓国の代表者たちはハードワークを重ねてきました。通常、伝統的な文化に携わる人たちは調和していなかったり、団結していなかったりするものです。しかし、私たちは例外的にこの3年間団結してプロジェクトを遂行し、すばらしい結果を残してきました。WHOによる他の標準化作業においても、今回の結果は1つのモデルとなるでしょう。

今後、他の標準化作業を進めていく上では、多くの困難が予想されます。しかし今、専門家、治療家、患者のほとんどすべての人が伝統医学の標準化を待ち望んでいます。彼らの要望に応じて、我々は標準化作業を進めていきたいと思っています。今回の標準化作業の成果が、他の標準化プロジェクトにも成功をもたらすことを望んでいます」

沈志祥氏（中華人民共和国国家中薬管理局局長）

「経穴部位の多くは、3カ国で共通した考えを有しているものの、その一部は、おそらくそれぞれが異なる歴史を重ねてきたことによって、異なった位置となっていました。しかし、3カ国はこの点についても引き続き協力していくので、私は特に大きな問題はないと思っています。

今回の会議の成果は鍼灸の発展に大きく寄与するものです。同時に、日本においては鍼灸業界や教育関係者にとって非常に良いものになったと思われる」

（訳：編集部）

われた感激を新たにした。

その他の印象

第二次日本経穴委員会作業部会委員としてよく質問されたことに、「経穴は簡体字や英語になるのか」ということであった。日中韓の非公式会議は、日本語・簡体字・英語の3カ国語での併記と検討が重ねられてきて、今回は英語で検討されてきた経緯がある。第二次日本経穴委員会は、今回の合意された英語版を、再び日本語に直していくことが当面の役割である。筆者は、理教連の教科書編纂委員でもあるので、さらには教科書としての視野も含めて提案・協力していくことになる。経穴部位の国際化よりも、個人的には重い責務である。

未来に向けて

JLOM（日本東洋医学サミット会議）や形井委員長の尽力もあって、厚生労働省医政局に伝統医学の担当部署が設置され、その担当官が挨拶に来られ、徐々に国内の東洋医学の立場が改善されていく感じがあった。また、世界が日本

の長所を吸収して追い抜かれた部分があり、国際戦略の課題があることを実感できた。一方、国内では鍼灸師の技術の画一化、促成栽培的印象を持っていて、職人・名人の減少も危惧している。バランスが取れ、かつ日本モデルの国際化を期待している。

視覚障害者の代表としては、鍼灸・あん摩マッサージ指圧の普及と視覚障害者の職業自立が課題であるが、シンガポールやモンゴルでは歴史が浅いが、視覚障害者も三療を手に行っているとのことであった。

世界を身近に感じ、微力な私とその世界に向けてできることは何かと考えた。経絡経穴学の教科書編纂、日本の豊かな鍼灸書の普及等、自分のできることを休まず一歩一歩やることこそが、世界への第一歩であり、視覚障害者の理解や自立等を深めることにつながると、再度確認した次第である。



閉会式になってようやく温和な表情を見せた崔昇勲氏。笑顔でこれまでの労をねぎらった



閉会直後、中国側のリーダー的存在であった沈志祥氏が形井氏に言葉をかける

WHO経穴部位国際標準化会議 inつくば

（日本鍼灸師会学術局経穴委員 河原保裕）

オープニングセレモニー

10月31日、WHO経穴部位国際標準化公式会議がつくば国際会議場で開催された。

午前9時、WPRO（WHO西太平洋地域事務局）の崔氏より開会の宣言があり、オープニングセレモニーが開始された。来賓には第二次日本経穴委員会運営団体である全日本鍼灸学会会長の矢野忠先生、日本東洋医学会会長の石野尚吾先生、東洋療法学校協会代表の後藤修司先生、日本鍼灸師会会長の相馬悦孝先生にご出席していただいた。また、今会議の共催である筑波技術大学学長の大沼直紀先生、厚生労働省医政局研究開発振興課の主査である牧野友彦氏、つくば市収入役の細田市郎氏にもご出席いただき盛大に催された。

矢野忠先生、石野尚吾先生、大沼直紀先生、牧野友彦氏、細田市郎氏にはご祝辞もいただき、よいプレッシャーと緊張を感じながら、これから始まる経穴部位の国際統一という大仕事をなんとかしてでも成功させなければという思いが募

ってきた。ご挨拶をいただいた後は、会議参加者（Temporary AdviserとObserver）の自己紹介が行われ、これから2日半をとともに頑張り、会議を成功させようという意志が伝わってきた。

オープニングセレモニーの後、つくば国際会議場の広いロビーの階段を利用して、集合写真を撮った。誰もが自分のカメラで撮ってほしいとカメラマンに渡すので、撮影が終わるまで笑顔を絶やさずにいた参加者は、会議前から疲れを感じたのではないかと心配するほどだった。さて、この後はいよいよ会議本番である。

ウェルカムパーティー

17時50分、ホテルロビーに集合しバスでパーティー会場へ移動した。

会場は日本庭園を望みながら会席料理を堪能できる「つくば山水亭」である。まずバスが到着して圧倒されたのが、武家屋敷を思わせる佇まいで、入り口階段の両側には一対の大きな仁王像がある。階段を上り、屋敷の長屋門をくぐると、その左手には金色に輝く七福神像が飾られてあり、外国の先生方は、不思議な空間に迷い込んだ感覚になったのではないだろうか。また枯山水の庭園を望みながら、日本情緒の神髄を五感で味わう会席料理はどのように感じたか

ろう。きっと日本情緒の一端を満喫するには充分なおもてなしであったと信じている。

坂口俊二委員の司会でパーティーは始まった。まず来賓挨拶として、日本鍼灸師会会長の相馬悦孝先生よりお言葉をいただき、また乾杯の挨拶は日本理療科教員連盟会長の緒方昭広先生にお願いし、お言葉をいただいた。

パーティーには、鍼灸ジャーナリストの松田博公氏、アメリカ合衆国から「Acupuncture Today」編集長のMarilyn Allen氏などが参加された。この会議で常に裏方として働いていただいた筑波技術大学で研究補助をされている中島千恵さん、通訳として参加していただいた朝日医療技術専門学校の伊ヶ崎克己先生、順天堂大学大学院医学研究科在籍の吉田和裕さんにも参加していただいた。

会場は4つのテーブルに分かれていて、中国の黄龍祥先生、呉中朝先生、胡工国先生、趙京生先生方を囲んで、小林先生、坂口先生、香取先生、筆者が同じテーブルについた。このテーブルでは、中国語・英語でのコミュニケーションとなるのだが、最初こそ言葉少なげであったが、小林先生が中国の黄先生に『黄帝内経明堂経』の巻物(長さ6m)をプレゼントしたのをきっかけに、パーティーに参加していたすべての先生方が、一斉にその巻物に興味を示し、一気に打ち解けていったのが印象的であった。

初日のためか、3カ国だけではなく初対面の参加国の先生が多いためか、はたまた女性が9名参加しているためか、日本庭園を望み、心が安らんでいるためか、比較のおとなしい宴会の運びとなっていたが、小林先生が日本の団扇を女性の先生方にプレゼントして、場は徐々に盛り上がっていった。小林先生の気遣いはさすがである。

また、初日の会議中に新聞社から取材があり、

参加していただいた先生方にその記事が載った夕刊をプレゼントしたところ、非常に好評であった。

いよいよ閉会時間となり、最後に本日の会議の議事進行をしていただいた副議長のBrenda Golianu氏と筑波技術大学保健科学部部長の一幡良利教授にご挨拶をいただき、ウェルカムパーティーは無事終了した。

筑波山登山

2日半の会議も予定通り終わり、3日目の午後、参加者全員で筑波山へと向かった。もし会議が長引けば、筑波山へも行けなかったのだが、全員の協力のもと(本当は筑波山へ行きかけたからか)会議も無事終了したため、筑波山ツアーとなったのである。もともと予定通り会議が終了したときのために、半日観光は計画されていた。1つは筑波山登山、もう1つはつくばサイエンスツアーと2つのオプションが用意されていて、好きなほうに参加すればよいのではと考えていたのだが、崔氏の「WHOは一致団結して全員で行動するので、みんなで筑波山へ行く」の一言で全員参加の筑波山と決まったのである。個人的には、つくばサイエンスツアーというものに非常に興味を持ったので、機会があればぜひ行ってみたいと思う。筑波山に出発するときに驚いたのが、外国の先生方の用意周到さだ。皆そろってハイキングシューズを持参していた。革靴で望んだのは日本人だけである。筑波山までホテルからバスで1時間と言われていたが、実際には40分ほどで筑波山中腹の筑波山スカイライン終点に到着した。バスではつくば市からボランティアで通訳として女性2人も参加してくれて、筑波山や万葉集やガマの油の話英語で説明してくれた。つつじヶ丘公園のロープウェイ乗口に到着し、ここより女体山山頂までロープウェイで移動した。紅葉には少し

早かったかもしれないが、それでも所々で色づいた山々は綺麗だった。筑波山は昔から関東の名山として、西の富士、東の筑波と並び称され、標高こそ876mだが、天気の良い日は関東一円を望めるそうだ。我々は女体山山頂からハイキングコースへと入ったが、とてもハイキングなどと呑気なことを言っているコースではなく、サバイバルなコースであった。山頂付近は残念ながらガスがかかり、景色の素晴らしさは半減したが、それでも参加者たちは峰の岩に登ったり、写真を撮ったりと筑波山を満喫していた。途中、山小屋(売店)で休憩し全員で甘酒をいただいたが、空気の澄んだ山頂でいただく甘酒をととてもおいしく感じたのは私だけではないはずである。また、ここの売店でガマの油を売っていて、お土産にと購入する先生方が多かった。やっとの思いで御幸ヶ原まで歩き、そこからはケーブルカーで下山した。到着場所は筑波山神社拝殿横であった。筑波山神社は、古来坂東無双の霊山と仰がれる「筑波山」に鎮座し、イザナギ・イザナミ男女二神を祀り、縁結び、夫婦和合の社として崇められている立派な神社で、多くの先生方がその大きさに驚いていたようだった。さらに下山し、パーティー会場へと向かうバスを待っていたのだが、予定の時間を過ぎてもなかなかバスは来ない。さすがに日の暮れた筑波山は寒く、みんなが身体を寄せ合ってバスを待っていた。かなり遅れてバスは出発したが、さすがに帰りのバスは何人かの先生方は居眠りをされていたようだった。会議で疲れたの

か、山歩きで疲れたのか、それともこの後のフェアウェルパーティーに備えてであろうか。

フェアウェルパーティー

お別れのパーティーはイタリアンレストランのアンジェブリッサで行われた。会議場から歩いて10分ほどの距離である。来賓でいらしていただいた日本東洋医学系物理療法学会の白島庸会長に乾杯の音頭をとっていただき、最後のパーティーは始まった。特別ゲストとして茨城大学の真柳誠教授にも参加していただいた。この2日半の会議ですべてがスムーズに決まり、安堵感からか和気藹々とパーティーは進んだ。特に香取先生はモンゴルの先生たちと打ち解け、日本の鍼を紹介し、モンゴルの先生に和鍼を刺鍼して、日本の鍼灸を強くアピールされていた。

また、歓談中にBGMでジャズピアノが聞こえてきたと思ったら、伊ヶ崎先生がフロアにあったピアノを弾いていたのだ。なんと多才な先生なのだろうと感心するばかりである。その間、小林先生と筆者は帰りにお渡しする会期中の写真やCDに焼く仕事が残っており、パーティー会場の片隅のテーブルで、パソコンを持ち込み作業に没頭していたのである。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、パーティーは終わりの時間を迎え、最後は各国の先生方と再会の約束と固い握手を交わしたのであった。

(第二次日本経穴委員会では2007年4月1日頃に都内でどなたでも参加できる報告会を開催予定。詳細は決まり次第、本誌または同会ホームページ<http://point.umin.jp/>にて報告します)

